In April 2022, Osaka City University and Osaka Prefecture University marge to Osaka Metropolitan University

Title	移動牧畜の類型と遷移に関する考察
Author	月原, 敏博
Citation	人文研究. 52 巻 8 号, p.729-753.
Issue Date	2001-12
ISSN	0491-3329
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	Publisher
Publisher	大阪市立大学文学部
Description	

Placed on: Osaka City University Repository

Osaka Metropolitan University

人文研究　大阪市立大学文学部紀要
第52巻　第８分冊　2000年47頁～71頁

移動牧畜の類型と遷移に関する考察

月　原　敏　博

1．はじめに

家畜を移動させる牧畜生産とその生活様式，すなわち遊牧（nomadic pastoralism または pastoral nomadism）や牧畜（pastoralism）の研究は，欧米の地理学や人類学では古くから盛んである。その膨大な研究蓄積は，例えばショルツ（F. Sholz）がまとめた文献目録［Sholz 1992］からも容易にうかがうことができる。日本は，佐原眞［1993］なども論じているようにいわゆる牧畜文化が伝播・定着しなかったところであるから，そこにおいて欧米ほど牧畜研究が盛んでないのは無理もない。しかし，ユーラシアをはじめとする各大陸の理解にこれを欠くことはできない。

本稿では移動牧畜（mobile pastoralism）の類型論を取り上げる。これは，従来の遊牧・牧畜研究において継続的に議論されてきた重要なテーマである。その議論の整理・紹介は，邦文では末尾至行［1961, 1967, 1972］，高橋正［1963］，竹内啓一［1969］，安田初雄［1958］などが行ってきており，近年，福井勝義［1987］や稲村哲也［1993, 1995, 1996］は新たな視角からこれを論じている。しかし，これまでに提出されてきた類型は多種多様で十分な整理・調整がなされているわけではない。既存の類型は現実の解釈にあまり役立たないと感じ，移動牧畜類型に関する議論には消極的な研究者も少なくない。この理由には，1：移動牧畜類型に充てられる用語・概念には混乱があること，とくに，遊牧・半遊牧・トランスヒュマンス（従来の訳語でいう「移牧」）・山地放牧（山地遊牧）といった基本的用語・範疇にしてすでに悪名高き混乱が見られること，2：個別事例をどの類型に分類するかは研究者によってずれが大きく，分類の基準・指標も研究者によってまちまちであること，3：分類の目的や対象地域のスケールに応じて，どの分類指標・基準を採用すべきかという議論が遅れていること，などがあげられよう。

とはいえ，移動牧畜の類型論とそれに付随してきた遊牧から定着農耕への遷移に関する議論は，われわれフィールド研究者が，事例の評価に際してその変

化の動態や地域性の把握を試みる際には生かされねばならない。とくに，他地域とも対照させつつ研究対象地域の家畜飼養の性格を把握することを目論むなら，従来からの議論を避けては通れない。

そこで本稿では上記のような問題を解決する糸口を探りたい。すなわち，まず議論の前提となる基本的な牧畜関連用語について整理する。ついで，過去に提出されてきた様々な移動牧畜類型を新たな観点から回顧することにより，多種多様な類型と分類基準・指標を，対象地域のスケールや類型化の意図に応じて再整理する。そして，実際の地域研究において必要となる，事例の経営形態の評価や家畜飼養の地域類型の抽出といった作業において，従来の移動牧畜の類型論をいかに役立てうるかを，その限界とともに考察してみたい。

2．基本用語の整理　－牧畜・畜産・遊牧－

牧畜（pastoralism）と類似の概念に畜産（animal husbandry, livestock industry）がある。ともに，人が家畜を飼うという家畜飼養（livestock rearing, stock-breeding）に関わるが，意味内容には違いがある。それを際だたせるのは，従来あまり指摘されなかったことだが，牧畜には放牧（pasturing, grazing）という飼養活動，すなわち野外の放牧地に家畜を放ってそこに生えた草や葉を採食させること（家畜にとっては，人による管理や保護を受けながらもある程度自由に歩行・採食行動をすること）が最低限含まれなければならないことである。しかし畜産にはそのような限定はない。

数多くなされてきた指摘に従えば，放牧される家畜の数にも限定がある。それは，放牧される家畜は群れ（flock, herd）でなければならないということである。つまり人による放牧活動とは「群れの面倒を見ること」でもある。したがって，家畜はウシ，ヒツジなどの群居性のある有蹄類の草食動物（いわゆる herd animal）であり，そうした牧畜的家畜でない，ブタ，ニワトリのような非牧畜的家畜を対象とする家畜飼養は牧畜ではないと考えられている。これも畜産にはない限定である。

こうして，当該のウシ，ヒツジなどの牧畜的家畜を飼養したとしても放牧という活動を伴わない飼養形式，例えばウシを舎飼いして放牧はせず，餌は飼い主が毎度畜舎に運んで与えてやる飼い方（いわゆる恒常的舎飼い）や，農家で1頭だけウシを飼うような場合には，それがたしかに畜産ではあっても牧畜と呼ぶことは適当でないと一般に考えられている。

畜産には広狭ほぼ二つの意味合いがある。広義の畜産は，上述のような畜群

の放牧活動を伴う牧畜のほか，恒常的舎飼いのような飼い方，さらに非牧畜的家畜の飼養をも含み，人が行う家畜飼養のすべてを包含する。つまり広義の畜産は家畜飼養一般にほぼ相当する広い範疇である。けれども，狭義の畜産はそれほど広い意味をもたない。狭義の畜産は，畜産物の出荷ひいては畜産物市場を前提にした産業，つまり近代的家畜飼養産業という意味合いをもつ。この点から，近代的性格が濃厚かどうかで牧畜と畜産とは対立する概念と捉えられることも少なくない。牧畜は前近代的で後進的な技術レベルに留まる家畜飼養であるのに対し，畜産は近代的な技術を用いた家畜飼養であるともみなされるのである。このように，家畜を飼う生産・生業活動という意味では，広義の畜産は牧畜を包含するが，狭義の畜産は牧畜と対立する範疇であるという捻じれた関係が存在する。

しかも，さらに別の重要な違いもある。それは，牧畜は単なる生産・生業活動としてではなく，狩猟・採集・漁労や農耕などと並べられる一つの生活様式としても認められている点である。しかし畜産にはそれがない。畜群の放牧移動にともなって，その世話をする人々も住処を移す移動牧畜は，定住生活とは対照的な生活様式と認められてきたのである。したがって，牧畜は畜産にはないような歴史的・文化的な意味合いも帯びている。言い替えれば，放牧という活動を伴いながら，人と畜群とが一緒に移動生活をする移動牧畜にこそ，牧畜の意味中心があることになる。牧畜や遊牧という語が，文化・社会の研究を進めてきた人類学や歴史学で頻用されるのに対し，畜産業の近代化を推進してきた農学・畜産学者たちは牧畜といわずに畜産というのがふつうであるが，その背景にはこのような事情があるのである。

次に，遊牧は，牧畜と並んでしばしば使われてきた重要な用語である。生活様式としての意味合いや，畜産との捻じれた関係において，この用語は牧畜とよく似ている。英語ではpastoral nomadismとする表現が多いが，研究者によってはnomadic pastoralismという表現を採る例もある。後者の表現は明らかに「移動（遊動）する牧畜」であり，牧畜のなかでもとくに家畜とともに人が移動生活をする牧畜，つまり移動牧畜とおおよそ等しい内容を意味することになる。しかし前者の表現の場合には，遊牧をノマディズム（nomadism，移動（遊動）生活）の一範疇と捉える余地を残す。つまり，狩猟に従う移動生活やいわゆる焼畑などの移動耕作（shifting cultivation）に従う移動生活に並置されうる概念である「牧畜に従う移動生活」を意味する余地がある。実際，研究者の中には牧畜ではなくて移動生活の意味をより強く意識した使い方をする人もある。

ただし，こうしたいわゆるノマッド研究の文脈から遊牧を捉える例はさほど多くはなく，またたとえその表現を採っている研究者でも牧畜の一形態として遊牧を捉えているのがふつうである。その意味では，この2つの英語表現の差にこだわる研究者は必ずしも多くはない。

正確にいうと，遊牧とは，理想的には移動牧畜のみに従う生業・生活様式であり，経営者の属する社会集団はただ家畜飼養のみによって生計を立てる。畜産物以外の食糧は，物々交換，農民からの取り立て，略奪などによって獲得し，農耕は行わない。定住家屋は持たず，共有放牧地をめぐって，畜群を保有する経営者の所帯あるいはこれを超える集団の全構成員がテントなどで移動して住処を換える生活を送る。家畜の飼料はすべて野草などの自然植生に依存する。なお，遊牧の定義のうちに，移動に規則性がないこと，つまり移動の時期（季節性）・場所・ルートが不規則であることがあげられ，それがnomadic（遊動的）であることの本義と考えられることもあるが，この条件を完全に満たす遊牧の例はほとんどありえないとも見られている。また，飼料の面でも，採草地を管理して草を刈って冬の飼料としたり，穀物栽培ではなくとも飼料を栽培しているような場合，それらを農耕とみなすかどうかでは意見が分れる。

このように，遊牧は，厳密にはかなり限定された種類の移動牧畜なのであるが，この語は移動牧畜（すなわち定着牧畜でない牧畜すべて）を指す広い意味で用いられることもある。この点は，次章でも触れるが無視できない問題である。なお，ここで触れた牧畜・畜産・遊牧のほかにも，半遊牧・トランスヒューマンス・山地放牧（山地遊牧）・農牧などの重要な基本的用語・概念があるが，それらについては次章で確認する。

3．移動牧畜の類型論と混乱

さて，従来提出されてきた移動牧畜類型は多種多様であるが，いまそれらの整理を試みようとするなら，少なくとも3つほどの観点を複合させて考えてみる必要があるように思われる。それは，1：地域類型か経営形態類型か？　2：分類基準・指標は何か？　そして，3：その分類基準・指標からうかがえる類型化の意図や有効性と限界は何か？　である。従来の移動牧畜類型は，地域分類なり地域区分を行う地域類型とみなしうるものと，超地域的・脱地域的に牧畜経営の型を議論する経営形態類型の二つに大別しうる。一般に，移動牧畜の類型論といえば，それは後者の経営形態の類型に関する議論であるが，この違いは，類型化の意図・目的とともに，採用される分類基準・指標に大きな違い

を生んでいる。

牧畜の様態に影響する条件は多様であり，気候・植生・地形などの生態条件から，土地・家畜の所有関係や労働の分業（専業）状況などの社会・経済的条件，さらに，技術の発展段階を含め，経営者のもつ民族・文化的条件や歴史的条件までに至る広がりがある。地域類型の場合は，ホリスティックな地域分類なり地域区分をすることが意図されるのであるから，そこでは牧畜に影響する多様な条件をどのように総合するのか，あるいは，地域性を代表する総合的な分類指標・基準として何を選ぶのかが肝要となる。

一方，経営形態類型は，個々の移動牧畜の事例を評価・類別するための，普遍化された経営形態の類型である。これは，地域類型ひいては地域性の追求を志向するのではないがゆえに，単なる地域的変数に過ぎないような各地域固有の事情は分類指標・基準から切り捨てられる。経営形態を分類する大きな意図・目的は，牧畜経済・社会に一般的な進化・発展法則を追求したり，過去や現在，そして将来の牧畜の動態を理解することに役立つような事例解釈の枠組みの提示にあるが，細かく見れば多様である。現代における遊牧の衰退・消滅という現実のゆえに，とくに定住化にともなう移動性の縮小（移動→定着）や農耕民化（移動牧畜民→定着農民）という遷移（ただし，歴史上はその反対方向の遷移が生じた例もある）を意識した分類が多いが，たとえばこの定着化と農耕民化の２つのうちどちらを主眼として分類するかだけでも，分類の仕方，分類基準・指標は変わってきうる。そのため，経営形態類型においては，単に採用される分類基準・指標が何かというだけではなく，それが類型化の（背後にある）意図・目的に適ったものかどうかが問題となる。以下，順に代表的な諸類型をみて検討を進めたい。

(1) 地域類型のアプローチ

地域分類・地域区分を行った地域類型として代表的なものは，生態条件，とくに気候・植生・地形などの条件を重視するものである。一例として，梅棹忠夫［1976］は，地球上の主要な遊牧文化－それは旧大陸に限定される－を以下の４つに分類した。

①ツンドラのトナカイ遊牧［シベリアおよびスカンジナビアの北端］

②中央アジアのステップのウマあるいはヒツジを主力とした遊牧
［モンゴルなど］

③砂漠とオアシスの地帯のラクダとヤギを主力とする遊牧

［西南アジア～北アフリカ］

④サバンナのウシの牧畜　［アフリカ。東アフリカからスーダン］

（なお，福井［1982］はこれに⑤地中海からアフガニスタンにかけての山岳地帯に分布するヒツジ牧畜，を加えて5つにしている。）

気候・植生という生態条件を主にした分類となっているが，ここではドミナントな家畜種もあげられている点が重要である。これは，マクロスケールでは家畜種の分布が気候・植生の分布によく対応するという事実だけによるのではない。家畜種は，気候・植生条件に規定される面があるとともに，それを飼養する住民の文化的嗜好や生活戦略によって選択されるものでもあるため，経営者の側の経営形態の性格ないしは文化的条件をもある程度反映する指標なのである。そのため，気候・植生という指標に家畜種という指標をも加味したこの類型は，地域の生態条件とともに，牧畜民の側の経済的・文化的な性格をもいくらか反映した類型であり，だからこそ有効性をもちえている。

類似の分類はカザノフ（A. M. Khazanov）によってもなされている［Khazanov 1994］。表1はカザノフの記述を筆者が整理したものであるが，彼は6つの大地域類型をあげたうえで，それぞれの亜類型についても詳しく議論している。カザノフ自身の表現によれば，生態＝経済基準，畜群構成，生態区，移動の性格と食餌システム，さらに歴史的な条件も考慮して，全世界の遊牧と半遊牧（後述）を地域分類したものだが，結果としては気候・植生条件と家畜種によって分類した梅棹の例とおおよそ同じような大分類となっている。亜類型は，地域または民族・文化集団による分け方となっており，つまり，大分類は気候・植生などの生態条件と家畜種で行ない，下位分類には経営形態や文化的条件を活用するという複合がみられる。

さて，以上の2例はもっともグローバルな地域分類を試みた地域類型の例だが，もう少しミクロなスケールの地域を対象にした類型化には数多くの例がある。当然のことながら対象となる地域のスケールは様々でありえる。例えば，環地中海地域，その一角としての北アフリカ，さらにその一角をなすアペニン山脈，その中のチュニジアの移動牧畜，といったそれぞれのスケールの地域内部での牧畜の類型化が可能であり，それは実際に行われている。

例えば，ベーコン［Bacon 1954］は西南アジアの遊牧民を次のように5つに分類した。①アラビア南部・南シリア・イラクのラクダ飼養ベドウィン（ラクダを神聖視。貴族，騎士で戦闘的。スンニー派イスラーム），②チグリス・ユーフラテス，シリアのヒツジ・ヤギ飼養民（移動範囲は河川近くに限定される。

表1．カザノフによる遊牧・半遊牧の地域類型［Khazanov 1994, pp. 40-69.］

地域類型	家畜種などに見られる特徴、および亜類型の説明
北部ユーラシア型 The North Eurasian type	特徴：ツンドラ以北のトナカイ遊牧。 3つの亜類型、Lapp, Komi-Nentsy, Chukchi-Koriakがある。ただしこの型に属す遊牧経済の性格は等質的で、この亜類型の設定は民族・文化の差違による。
ユーラシアステップ型 The Eurasian Steppe type	特徴：ウマとヒツジを主とする。 多くの亜類型、Inner Asian (Mongol), Kazakhstanian-Middle Asian, East European, South Middle-Asian(Turkmenian)がある。遊牧経済の性格は北部ユーラシア型ほど等質的ではないが、これらの亜類型の設定は経済の違いよりむしろ民族・文化の差違による。ただし、South Middle-Asianは中東型に近い性格を持ち、独立的である。
近東型 The Near Eastern type	特徴：ラクダが重要な役割を果たす。 少なくとも4つの亜類型、Arabian, North African, Saharan, northeast Africanがあるが、より細分することも可能。遊牧経済の性格は北部ユーラシア型やユーラシアステップ型ほどに等質的ではない。
中東型 The Middle Eastern type	特徴：小家畜中心。特にヤギが多い。 いくつかの点で近東型とユーラシアステップ型の中間型としての特徴をもつ。とりあえず次のような亜類型を設定しうるが、遊牧経済の性格は他のいずれの型よりも多様である。western (mountainous, eg. Kurds, Lurs, Bakhtiari), northwestern (Shahsevan, Turkic groups in Iranian Azerbaijan), northern (Turkmen and Turkic speaking nomads in Iran and Afghanistan), southern (Baluch, Brahui), eastern (nomads of Afghanistan)
東部アフリカ型 The East African type	特徴：ウシを主とする。 遊牧経済の性格は、北部ユーラシア型ほどではないが近東型や中東型よりも等質的。その多くで輸送用・乗用の家畜利用が欠如している点が特徴的である。（亜類型は記されていないが、例示される民族はRendille, Somali, Maasai, Samburu, Jie, Nandi, Dodos, Pokot, Mandaryなど。）
内陸アジア高地型 The High Inner Asian type	特徴：ヤク。高地種のヒツジ。 代表例はチベットの遊牧民・半遊牧民。亜類型としてパミールのキルギス。

注）この類型は遊牧および半遊牧を対象とし、牧夫放牧（トランスヒュマンス）や農耕を主とする農牧は対象としていない。
　なお、sudano-saherian typeはそれ自体等質性に欠け、その位置づけは難しいとして、どの型にも亜類型として含められてはいない。sudano-saherian typeは、おそらく近東型と東部アフリカ型両方の周辺型とみなしうるであろうとしている。
　また、独立した類型としてsouth Asian (Indian) typeを設定することについては、半遊牧にも当たらずせいぜい牧夫放牧（herdsman husbandry）にすぎないので遊牧類型の一つとして範疇化することはできないとしている。ただし、家畜種ほかの特徴から判断するなら、ラジャスタンやグジャラートの移動牧畜は中東型の亜類型とみなしうることは確実であるとも記している。アンデスの牧畜についても、南アジアの場合と同じくせいぜい牧夫放牧にすぎないので遊牧類型として範疇化することはできないとしている。

ラクダ飼養ベドウィンや定住民に従属。シーア派イスラーム)，③チグリス・ユーフラテスのウシ・スイギュウ飼養民（移動範囲はいっそう狭い。平和的で農耕を行なう者もある)。④アラビア半島の，ヒツジ飼養民とラクダ飼養民との間，あるいは遊牧民と農民との間の漸移形態，（ヤギ・ヒツジのほかにラクダ・ウシを飼養していくらか穀物を栽培する。移動領域はかなり狭い)，⑤狩猟を行なって遊動するノマッド（Sulubb または Sleyb)。

さらにミクロな地域を対象としたものもある。例えばビショップ［Bishop 1990］はネパールのカルナリ川流域の移動牧畜パターンを次の4つに分類した。①すべてのパハリおよび大部分のボティアによるヒツジ・ヤギ・ヤクーウシ雑種・ウマの移動牧畜（村落標高1100～3200 m)，②上部フムラ，リミ・パンチャヤートのボティアによるヤク・ヤクーウシ雑種・ヒツジ・ヤギ・ウマの移動牧畜（村落標高3700～3900 m)，③上部ムグ，ムグ・パンチャヤートのボティアによるヤク・ヤクーウシ雑種の移動牧畜（村落標高3650 m)，④チョウダビサ・ダラ，ルム・パンチャヤートのマンダラ・ボティアによるヒツジ・ヤギ・ウマの移動牧畜（村落標高3300 m)。

ここで注意しておきたいのはスケールと対象に応じて分類指標となる生態条件や歴史・文化的条件が変化しうることである。生態条件でいえば地形がその例である。梅棹やカザノフのようなグローバル・スケールの地域分類では，山地というような地形条件は気候の局所的な撹乱因子としてほぼ無視されるが，対象地域のスケールがよりミクロになるほど地形に撹乱された気候・植生や，河川などの水条件の分布が顕著となり，地形とそれに関わる水条件がクローズアップされてくる。つまり，キャンプや村落の位置とそこに滞在する季節などを含め，移動牧畜のルートと地形や水条件との対応関係が重視される。また，類似のことは歴史・文化的条件についても言え，民族や文化だけでなくよりミクロな社会関係や経済までが分類指標に入ってくる。さらに，小地域になればなるほど，家畜種によって移動の形態が異なって別個の移動牧畜の形態が並存することや，同一の村落内でも民族・社会集団の違いにより飼養する家畜種や移動牧畜の形態が異なることなどが見えてくる。つまり，ミクロになればなるほど，地域類型といっても後述の経営形態の分類をも実質上組み込んだものとなってくるわけである。

しかしここでは，とりあえず次のことを確認しておきたい。すなわち，地域類型を行なうさいには，分類指標としては研究対象地域の現実の気候・植生がまず重要であり，さらにスケールに応じて地形や水条件の方がそれら以上に重

要ともなりうる。これは，家畜の生存に不可欠な草と水という資源の質とその分布こそが重要であるとみなしている点では一貫したものである。そうした生態条件を主に，歴史・文化的条件を加味する分類の仕方が地域類型には有効であるが，小地域を対象とするほど，経営により直接的に関わる社会・経済的条件を分類指標に取り込む必要がある。また，家畜種という指標は，生態と経営・文化の双方に影響される意味で，どのスケールにおいても不可欠の指標であることが確認できる。

(2) 経営形態類型のアプローチ

さて，一般に移動牧畜の類型として流布・議論されてきたのは，地域類型ではなく，経営の形態そのものを分類した類型群である。ここでは，現実の地域の生態条件は，経営形態に影響しはすれどもそれは地域的に変化する二次的な条件にすぎないと意図的に無視され，超地域的ないし脱地域的に，経営の性格から移動牧畜を分類することが目標とされる。

(i) 福井・稲村による生業分類とジョンソンによる移動の空間形態分類

福井[1987]は，インゴルド(T. Ingold)[Ingold 1980]やカザノフ[Khazanov 1994（第2版。初版は1983年)]の議論を受けつつ，図1のようなかたちで動物を対象とする生業の分類を試みた。その意図は牧畜の形態分類にある。さらに稲村[1993, 1995, 1996]は，図2のようなかたちで福井による分類の牧畜の部分の修正を試みた。インゴルドの議論を参考にして福井が設けた家畜飼養の分類指標は，土地の共有／私有（牧畜か畜産か)，農耕を兼業するか否か（遊牧か農牧か)，農耕・牧畜それぞれが移動するか否か，といった基準である。前近代的な遊牧・移動牧畜と近代的な酪農やランチングを両極に置き，農業との関係と農・牧それぞれの移動性を軸に，すべての家畜飼養の経営形態を分類したものといえる。移動牧畜だけではなく，定着的な家畜飼養を視野に入れて，定牧（定着牧畜)・舎飼い畜産（定着畜産)・定牧遊農といった形態が認められている点に特徴がある。

ここでの分類基準・指標は，遊牧から定着農耕へという遷移に関わる諸契機ともみなすことができる。つまり，いまかりに＜移動規則性→農耕結合→（定着化）→土地私有化＞という順序で分類基準を並べ，それに対応する経営形態を並べてみれば，福井および稲村の分類に現われる経営形態は，

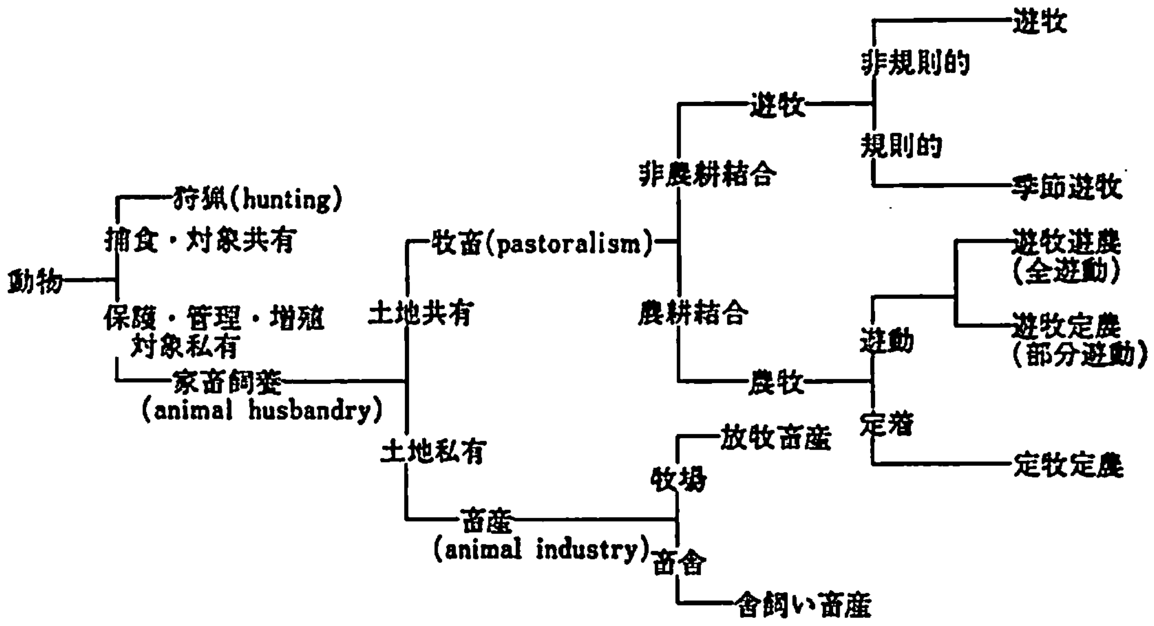

図1．福井による動物を対象とする生業の分類 [福井 1987, p. 14.]

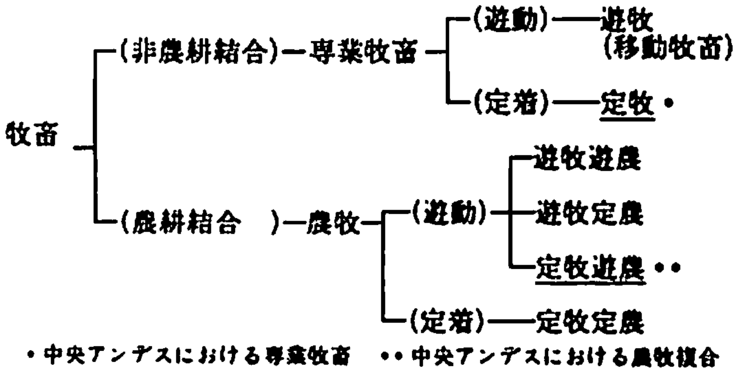

図2．稲村による福井［1987］の分類の修正案 [稲村 1995, p. 233.]

遊牧遊農
遊牧→季節遊牧→ 遊牧定農 →放牧畜産
定牧遊農 舎飼い畜産
定牧定農

という，一連の遷移のモデルとして活用することも可能であり，定着化の過程で現われうる農牧兼業経営の形態を整理・考察するうえでも参考になる。さらに，とくに稲村がより明確に指摘した定牧の概念は，遊牧から定着農耕という遷移以外の遷移がありうること（例えば，定牧から定牧遊農や遊牧，あるいは

放牧畜産への遷移）も示唆しうるので興味深い。とはいえ，この類型では気候・植生のほか，移動のあり方と地形との対応関係，さらに家畜種まで分類指標から切り捨てられているので，現実の地域に見られる地理的分布や地域的分化，地域区分といった課題へ利用するには，それらの条件を何らかの方法で組み込む工夫が要ることになる。

次に，西南アジアからサハラにかけての地域を扱ったものではあるが，ジョンソン［Jhonson 1969］による移動牧畜の形態分類を見てみよう。これは，経営形態や家畜種など多数の指標を取り込み，しかも移動のあり方と地形との対応関係という生態条件を重視しながらも，福井や稲村とはまったく異なる意味で超地域的な類型化を行った例である。ジョンソンは，遊牧民に関する民族誌情報を要約して数多くの指標を一覧表に整理したうえで，一種のクラスタリング作業を行ったのだが，移動ルートの空間的形態から，移動牧畜を水平型と垂直型に大別したのちに，下位分類では全体を５つに分類した。以下のとおりである。

① Horizontal Nomadism 水平遊牧
　①－１ Pulsatory Nomadism （搏動型）
　①－２ Elliptical Nomadism （楕円型）
② Vertical Nomadism 垂直遊牧
　②－１ Constricted Oscillatory Nomadism （収縮振動型）
　②－２ Limited-Amplitude Nomadism （振幅限定型）
　②－３ Complex Nomadism （複合型）

詳細な説明は省略するが，この類型化においてジョンソンは移動の空間的（地図的）形態を大分類の基準にしうることを示した。気候・植生という現実の地域の生態条件を直接的には組み入れてはいない意味で，上記の梅棹やカザノフのような，旧大陸全体を視野に入れたマクロスケールの地域分類とはまったく異なっている。しかし，水平的な移動牧畜と垂直的な移動牧畜とでは根本的な質の違いがありうる，すなわち気候帯を問わずとも移動ルートの起伏すなわち地形こそが重要なのだという判断を示した点で，ジョンソンの分類は興味深い。実際，ジョンソンは後に世界各地の移動牧畜の事例を扱ったギャラティとの共編著［Galaty and Jhonson 1990］においても，

① pastoralism of the plains（semiarid pastoralism）
② pastoralism of desert and tundra（arid pastoralism）
③ mountain pastoralism（vertical pastoralism）

という具合いに章だてをして全体を構成している。ジョンソンの観点が重要なのは，上述のように，環地中海地域とか北アフリカといった程度の大きさよりも小さな地域スケールにおいては，地形性降雨など，地形性の気候・植生条件が，移動牧畜の地域的変異に大きく関わってくることにある。少なくともこの地域スケール以下で地域類型を論じる際には，ジョンソンが主張する移動ルートの地形の問題が重要であることは，少なからぬ研究者に認められているのである。この，水平か，垂直かという移動形態分類については，後にさらに議論したい。

(ii) 古典的な類型とその混乱

さて，ここで今日までの地理学におけるもっともオーソドックスで古典的な移動牧畜の類型について述べねばならない。図 3 に示すように，移動牧畜の類型については，アルボ［Arbos 1922, 1923］の研究以来，

① 純遊牧（True or Full Nomadism, Vollnomadismus）
② 半遊牧（Semi Nomadism, Partial Nomadism, Halbnomadismus）
③ トランスヒュマンス（Transhumance ないしは Greater Transhumance）
④ 山地放牧（山地遊牧，Mountain Nomadism または Lesser Transhumance, Bergnomadismus, Estivage）

と 4 分するのがもっともオーソドックスな分類法である。アルボ［Arbos 1923］が，②を①に含めて 3 大類型を提示したこともあるように，研究者によっては，④を③に含めた 3 大類型，③・④を②に含めた 2 大類型，②を①に，④を③に含めた 2 大類型が提示された例もある。しかし，古くからの議論の中でもこの 4 つの類型は今でも生き残っている。それは，近年のショルツ［Scholz 1992］による整理でもこの 4 大類型が踏襲されていることや，いくつかの点でこの古典的な分類には反対するカザノフ［Khazanov 1994］でも，後述するようにおおよそこれに沿ったかたちの移動牧畜の 4 大類型を提示していることからも明らかである。

ここで，①の純遊牧はすでに先に記したとおりの条件を満たす厳密な意味での遊牧にほかならないので説明は繰り返さないが，②の半遊牧以下の各範疇・用語について，おおよそ合意が得られている範囲での定義と，その語義の混乱状況を記しておかねばならない。

②の半遊牧は，ほぼ，牧畜以外の農耕を行う点で①の純遊牧とは異なると認められている。つまり，半遊牧の「半」の意味は，農業を含む半農半牧という

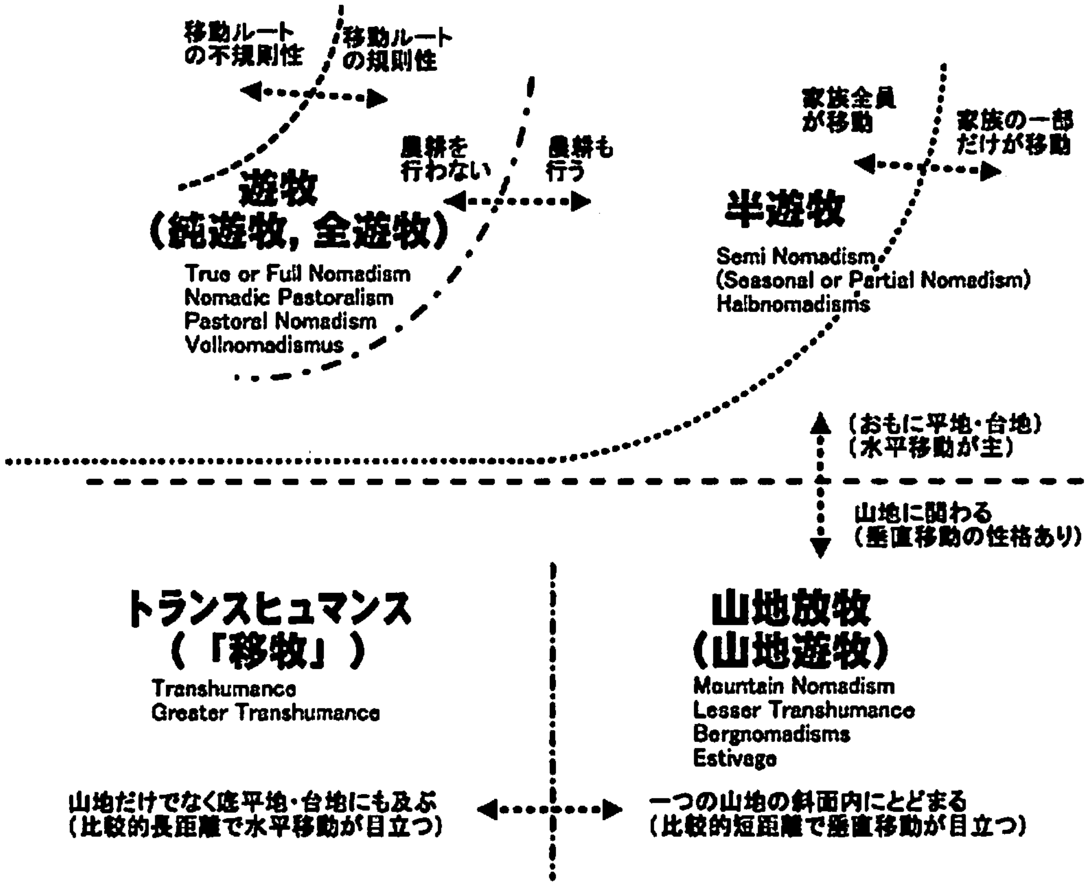

図3．もっともオーソドックスな分類による移動牧畜の
4大類型 ［Scholz 1992, pp. 8-20. などにもとづいて筆者作成。］

意味の「半」である。その意味では，半遊牧とは先に図1・図2で見た福井や稲村の分類では農牧（agro-pastoralism）と記されたものにあたる。しかし問題がある。その一つは，農・牧それぞれの量の大小の問題である。後述のカザノフのように，半遊牧は半農半牧でも牧畜の方を主とするものに限定すべきで，一方，農牧は農耕の方を主とするものにあてるべきだという主張がある。つまり半遊牧と農牧は主牧従農と主農従牧であり，異なるものだと考える研究者も少なくない。もう一つの問題は，半遊牧の「半」の意味が，構成員の一半なり半分以上なりが移動（他は定住農耕）するという「定着農耕社会における移動牧畜専従者の存在」の意味に解される場合と，全構成員が移動しながらも時期（季節）的に移動時期・定住時期が交替する（つまり季節的に定着的な家畜飼養と移動牧畜が交替する）時間的交替すなわち「移動の規則性・季節性」の意味に解釈される場合があることである。ここから，研究者によっては全構成員が移動することを半遊牧の条件にすることも生じている。また，上記の福井や稲

村の例のように，後者の条件を満たす①純遊牧または②半遊牧を「季節遊牧」として①と②の中間に独立させて設定するような場合も生じている。こうしたあいまいさは，②の半遊牧を①の遊牧に含んだり，③・④を②に含む分類例を生むもとになっている。なお，半遊牧では経営者は一般に固定家屋を所有している。

さて，③トランスヒュマンスと④山地放牧は，ともに農耕を含む意味では②の半遊牧なり農牧といえるものだが，③・④が②と違う点は，ほぼ，移動ルートが山地に及ぶことであると認められている。

③のトランスヒュマンスは，ピレネーやアルプスの，環地中海地域における山地と平野の間の比較的長距離に及ぶヒツジの移動牧畜に由来する概念であり，④の山地放牧は，やはりスイス・アルプスやオーストリア・アルプスの，ヒツジのみならずウシの移動牧畜を含むことも少なくないいわゆるアルム経済(Almwirtschaft) に由来する概念である。トランスヒュマンスやアルム経済については，冒頭で記した諸文献のほか，アルボ [Arbos 1922, 1923]，ピティ [1956]，ヴェルト [1968]，ド・プラノール [de Planhol 1966ほか]，マトレー [Matley 1967] などに見られるように古くから多くの議論がある（日本では上野福男や池永正人によるアルム経済（アルプ経済）研究 [上野 1986，上野・池永 1983 など] や，谷泰 [1996] や小林茂 [1974] によるトランスヒュマンスの研究が知られている)。こうした長い議論の背景にあるのは，とくに西欧におけるトランスヒュマンスの衰退が，平野部の農村の社会・経済変化にも大きな意味を持ったという歴史的事実である [例えば，ブロック 1959: pp. 272-317]。

それはさておき，トランスヒュマンスの語義には混乱も少なくない。環地中海地域のトランスヒュマンスは，ブローデル [1991: pp. 134-161] などの歴史家も記したように，家畜の所有者は一般に農民の地主だったのであって，牧夫は一般に雇われ牧夫であるか，いくらか家畜を保有していても多くの家畜を預託された牧夫であった。また，牧夫のみが移動して他の構成員は農耕を営む定住生活を送ったため，「山地に及ぶ移動牧畜」というよりも，「移動牧畜専従者の存在」という意味を優先させて解される場合がある。さらに，トランスヒュマンスは「移動のルート・時季の規則性」が高かったことから，「移動ルートの固定性と移動の季節性」の意味を優先させて解される場合もある。このほかにも，山地の自然条件の高度による多様性，とくに「複数の生態区（高度帯）を利用する」という意味が強調される場合もある。これらの条件のどれをトランスヒュマンスの要件とするかによって，この語の意味は相当に異なってしまう。

場合によっては平地の移動牧畜に対してこの語が用いられていることさえある。

さらに加えて，日本において生じた別の深刻な概念上の混乱もある。日本の地理学界では，トランスヒュマンスという語に「移牧」というまぎらわしい訳語が当てられ，それが固定化した。このため，さらに日本ではトランスヒュマンス（「移牧」）を移動牧畜一般と混同することが生じた。筆者は，「移牧」という訳語は不適切で，Transhumanceは邦文では「トランスヒュマンス」のままで表記すべきと考える。語感からしても「移牧」は移動牧畜に等しい語として用いるべきだと考えるが，本稿では余計な混同を避ける意味であえて移動牧畜と記してこの訳語は使用しない。

次に，④の山地放牧（山地遊牧）であるが，これがもともと意味しているアルム経済とは，移動牧畜だけではなく，谷あいの恒久村落での定着農耕を含む山地の農牧経営を意味する。したがって山地放牧とはアルム経済のうちの牧畜経営の部分をおもに指すものである。③トランスヒュマンスと同様に，牧夫の属す社会集団は農耕を兼業するため，この意味から③・④はともに②の半遊牧に含まれる場合がある。③のトランスヒュマンスと④の山地放牧との違いは，一般に，③が比較的長距離の季節的移動であり移動範囲が山地のみならず平地・台地に及んで水平的移動が目立つのに対し，④は比較的短距離の季節的移動でその移動範囲は一つの山地斜面内に留まり，水平移動よりも上下移動を主眼とすることにあるとされている。さらに，③では年中，移動放牧を行うのに対し，④では冬季は農村で家畜を舎飼いすることが挙げられる場合もある。ただし，図中にも記しておいたが③をGreater Transhumance，④をLesser Transhumanceとする例があるように，移動距離の大小などは無視して④が③に含まれることもある。

なお，図3において④山地放牧を西欧ではMountain NomadismとかBergnomadismusと表現する例に見られるように，ここに山地「遊牧」という語が当てられていることは，遊牧概念の混乱を生むもととなっている。すなわち，遊牧は，広義では牧畜または移動牧畜一般と同じ意味で使われてしまっている（農耕を含む移動牧畜経営をも「遊牧」と表現してしまっている）。この点には大きな注意が必要である。

以上のように，古典的な4大類型は，多くの文献を読み比べてみるとこのような整理がいちおう可能であり，それぞれの語のもつ問題点も明らかとなるのであるが，とくに②半遊牧，③トランスヒュマンス，④山地放牧の相互の境界や包含関係が明確でないことに，もっとも深刻な問題がある。始めの方で触れ

たこの悪名高き混乱の見取り図はすでに示したのだが，この点は後で再び触れることになろう。

ただ一つ付け加えておけば，トランスヒュマンスにしろ，アルム経済に由来する山地放牧にしろ，この一世紀のうちにかなり退潮したとはいえ西欧において長らく存続した山地の生活型であったことは興味深い。西欧の研究者の移動牧畜研究は，バルカン半島にかつて存在した西欧最後の遊牧の例を含め，地中海を囲む山地やアルプスの山地生活様式の研究から始まっており，その土着の概念の他地域への適用が，これまでずっと繰り返されてきたといえる面があるからである。

(iii) カザノフによる古典的類型の修正

カザノフ [Khazanov 1994] は，上記のような混乱を回避することを意識して古典的な 4 大類型の改訂を試みた。彼は，表 2 のような牧畜の形態分類を示したのである。この表は，表 1 と同じくカザノフの記述を筆者が整理したものであるが，古典的な 4 大類型との大きな違いは，上記③・④のトランスヒュマンスや山地放牧は山地の経営形態であるとして，大類型としてはそれらの語と範疇を採用しなかったことである。その代わりに，山地という地形には何ら限定されない範疇として，牧夫放牧 (herdsman husbandry) と半定牧 (semi-sedentary pastoralism) を設けなおした。また，ここでは，半遊牧は牧畜を主とする半農半牧 (主牧従農)，上記④の山地放牧にあたる半定牧 (半定着牧畜，農牧) は農耕を主とする半農半牧 (主農従牧)，と定義している。

カザノフ [Khazanov 1994 : pp. 23-24] は，地中海を囲むピレネーやアルプスの移動牧畜様式を指すトランスヒュマンスの語を，安易に他の地域の事例に適用することを戒め，とくに，トランスヒュマンスを季節移動牧畜 (季節遊牧) と解釈して必ずしも山地と関わりのない半遊牧にまで適用することこそ，上記における②・③・④の範疇相互の混乱を招く深刻な問題と見た。その結果，カザノフによる新たな移動牧畜の 4 大類型からは，山地という地形条件は大分類の指標から外され，下位分類の指標とされたのである。ヒマラヤの移動牧畜を安易にトランスヒュマンスと表現すべきでない，とラトエンス [Rathjens 1973] やウーリヒ [Uhlig 1973] が主張したように，西欧以外の地域の移動牧畜事例を記述するさいに，トランスヒュマンスその他の西欧固有の意味が濃厚な用語を安易に使用すべきでないという議論は，最近に始まったものではない。しかし，カザノフが設けた新たな範疇である牧夫放牧と半定牧 (農牧) は，実

表2．カザノフによる牧畜の経営形態分類 [Khazanov 1994, pp. xxxii, 17-25.]

1．移動牧畜 mobile pastoralism
移動牧畜の形態を列挙すればきりがないが基本は次の4つ。この分類は食糧生産経済のなかでの牧畜の重要性の程度、とくに牧畜と農耕の比率によっている。

(1)純遊牧 pure pastoral nomadism
純粋な例では農耕は補助的なものさえ不在。一般に遊牧は他の移動牧畜形態と共存。現実には半遊牧の方が遊牧よりはるかに広く分布している。

(2)半遊牧 semi-nomadic pastoralism
一年中あるいは一年のうち大半は移動牧畜に携わる。牧畜が主であるが、補助的に農耕にも携わる(北部ユーラシアの場合には狩猟・漁労)。半遊牧には非常に多くの変異があるが、基本は二つ。当該社会が牧畜従事者の集団と農耕従事者の集団に分れているか、そうでないかである。

(3)半定牧(農牧) semi-sedentary pastoralism (agro-pastoralism)
移動牧畜ではなくて農耕を主とする。農耕社会の一部の集団や家族が牧畜に携わり、季節的な移動牧畜を行う。移動牧畜の距離と期間は、同じ環境のもとでは半遊牧の場合よりも短くなる。なお、半定牧民は、しばしば一定量の飼料をたくわえる。

(4)牧夫放牧または遠距離放牧 herdsman husbandry or distant pastures husbandry,
人口の大部分は定住して農耕に携わり、専従の牧夫が家畜(の一部)を通年放牧する。放牧地は定住集落からかなり遠いこともある。ウシの場合は、通常、一年のうち一定の期間は家畜囲いや畜舎に入れて飼料を与える。これは、ドイツではTeilnomadismusとも呼ばれる。
山地において顕著な牧夫放牧の変異は、ソビエト人類学でいうヤイラーク牧畜(yaylag pastoralism)。これはほぼ西側でいうトランスヒューマンス(transhumance)に相当する。

2．定着畜産(定着的家畜飼養) sedentary animal husbandry
未開社会または伝統社会における定着畜産は、一般に農耕を補完するもののみ。他の移動牧畜形式と同様にいくつもの変異があり、その例として以下のようなものがある。

(1)世帯ごとの舎飼い畜産 household-stable animal husbandry
一年のうち大部分は家畜を集落近傍の放牧地で放牧する(家畜は毎日集落に連れ戻すことが多い)。それ以外の時期は、畜舎や家畜囲いに留めて餌を与える。

(2)自由放牧による所帯ごとの定着畜産(定着的家畜飼養)
sedentary household husbandry, or stock breeding, with free grazing
定着放牧による家畜飼養。もっとも原初的な形態の牧畜である。一般に、飼料をたくわえず、畜舎・家畜囲いをもたない。あってもわずか。家畜頭数は少なく、家畜の世話も最低限にとどまる。

際上は，それぞれもとのトランスヒュマンスと山地放牧に多かれ少なかれ対応していることが読み取れる。言い替えれば，旧来の4大類型は，いくらか変形をしながらも，カザノフによる新しい分類でも生き残っているともみなしうる。

いずれにせよ，表2のカザノフの類型では，山地という地形条件が大分類の指標からは外され，農・牧経営における農耕と牧畜の比が主たる分類基準・指標となった結果，旧来よりも，遊牧から定着農耕へという遷移系列が意識され

た経営形態分類が行われたことになる。すなわち次のとおりである。

遊牧 → 半遊牧 → 半定牧（半定着牧畜。農牧）
（牧が主） （農が主。移動牧畜は一部の季節のみ）
→ 牧夫放牧または遠距離放牧
（農が主。専業牧夫がつき遠距離を移動放牧）

なお，カザノフは，移動牧畜のうち遊牧と半遊牧については広汎な議論を展開したが，半定牧と牧夫放牧については詳しく扱っていない。移動牧畜ではない定着的家畜飼養についてはそれ以上に触れるところが少ないが，表２の下方に記しておいたように，移動牧畜ではない定着的家畜飼養にも，恒常的舎飼いもあれば定着的な放牧もあることを記しており，そこにはいくつかの類型を設けうることを示唆している。

（iv）分類指標と類型化の意図

以上のように顧みた経営形態類型は，それぞれが個性的であり，類型化の指標・基準が異なっている。カザノフの経営形態分類は，「農耕の兼業の有無」とその程度という「農耕と牧畜の比重」を主に「社会的分業」と「移動性（移動牧畜の季節性と定住村落からの距離）」を組み込んだ結果，遊牧から定着農耕へという遷移，とくにその前半部が強く意識された分類となっている。しかし，カザノフの関心は遊牧・半遊牧にあり，彼のいう農耕を主とする半定牧ないし農牧や牧夫放牧（または遠距離放牧）と定着的家畜飼養は詳しく検討されないため，古典的分類における半遊牧・トランスヒュマンス・山地放牧という半農半牧の諸類型の間の混乱は，半遊牧の意味を明確化する範囲でしか解決されていない。

この点，福井や稲村の分類は，「農耕の兼業の有無」に加えて「農・牧双方の移動性（遊動か定着か）」を組み込んで農耕と牧畜を平等に扱った結果，遊牧から農耕への遷移，とくにその中間部・後半部をなす半農半牧の諸類型と定着的家畜飼養を再整理しうる一つの観方を提示している。彼らは，さらに土地所有を組み込むことで，「家畜飼養の近代化の程度（牧畜か畜産か）」という基準により現代的な産業発展の遷移まで視野に入れた点にも，カザノフにはない特徴がある。

ジョンソンの分類では，遊牧から農耕への遷移は直接関わってこない。彼の分類は，非常に多くの指標を分析しながらも「移動ルートの空間的形態」という意味での「移動性」と「地形」の重要性を喚起した点で，他の分類にはない

問題提起をしているとみなしてよい。

このように見てくると，移動牧畜の4大類型というもっともオーソドックスな分類は，カザノフの分類とほぼ同様の特徴をもちながらも，トランスヒュマンスと山地放牧という山地特有の農・牧兼業経営の範疇を認めていた点では，ジョンソンが喚起する「地形」の意義をもある程度含み込んでいたわけであり，上述のとおり，4つの類型を識別するのに実に多くの分類基準・指標が取り入れられていたことからすると，もっともオーソドックスな古典的分類は，必ずしも体系ではないにしてもある意味でもっとも総合的な，言い替えれば地域類型にももっとも近い種類の分類であったともいうことができる。それが，現在でも生き残っている理由といえるのではないか。ただし，古典的な分類や，それを修正したカザノフの分類では，遊牧から定着農耕への遷移や，それにある程度対応する形で「社会的分業」や「移動性」も考慮されてはいるが，福井や稲村の分類が提起する「定着的家畜飼養」や「家畜飼養の近代化」，ジョンソンの分類が提起する「移動ルートの空間的形態・地形」というものが，類型化を行なう視野からはまったく欠落しているか，あるい考慮されていても粗い注意しか払われていない。ここに，大きな問題があろうと思われる。

(3) 二つのアプローチの複合

以上を通じて，地域類型と経営形態類型では類型化の目的とともに，採用される分類基準・指標に大きな違いがある様子が確認された。地域類型の場合に主要な分類指標となるのは，スケールを問わず，気候・植生・地形・水条件などの，家畜の食糧となる資源の質と分布に関わる生態条件と家畜種であり，民族・文化的条件が補完的に利用される。さらにミクロスケールでは社会・経済的条件までが考慮されねばならない。

経営形態類型の場合には，その類型化の意図は牧畜経済・社会の遷移・動態の理解に役立つ枠組みの提示にある。ここでは，重要な分類指標・基準は，その類型化の意図に左右されるが，従来は，とくに農耕民化（移動牧畜民→定着農民）や移動性の縮小（移動→定着）という遷移に関わる分類基準・指標が選ばれることが多かったといえる。ただし，古典的な分類やそれを修正したカザノフの分類では，

①移動牧畜を主に扱って定着的家畜飼養が欠けている，

②遊牧から定着農耕へという遷移でしか近代化が捉えられてない，

③移動の空間的形態・地形が2次的な条件としてしか考慮されてはいない，

というようないくつかの限界もあることも明らかとなった。

本稿では，アプローチがまったく異なる分類といってよい地域類型と経営形態類型とを分けて，それぞれで採用される分類指標・基準と類型化の意図を整理したが，ここで注意したいのは次の点である。すなわち，地域類型でもミクロな地域を扱うほど社会・経済的条件までを考慮して経営形態類型に接近していかなければならないように，経営形態分類であっても，限定された地域のなかで見られる様々な経営形態の遷移・動態を捉えようとするなら，気候・植生のみならず地形・水条件などの生態条件や，家畜種は当然考慮されざるをえない。つまり，ミクロな地域や村落の事例を扱うほど，双方のアプローチの接点を探る作業はどちらのアプローチを主にとっても避けられない。そして，カザノフが地域類型と経営形態類型を二つとも提出していたように，地域研究という立場から牧畜・家畜飼養を研究する者は，この双方からのアプローチを複合させる課題を背負っているということである。一部の研究者が移動牧畜の類型論に熱心でないのは，従来の議論がこの複合に成功してきたとはいえないからではないだろうか。結果として，現実の動態に関わることがほとんどない平板で静的な地域類型と，現実の地域条件に言及することがほとんどない経営形態類型が並存し，しかも後者は動態の把握を意図しながら，ごく一部の動態しか把握・説明していなかったといえるのではないか。

4．おわりに　－これからの課題－

以上，本稿では移動牧畜の類型論を取り上げ，牧畜関連の用語・概念の整理をすることを手始めに，過去に提出されてきた様々な移動牧畜類型を地域類型と経営形態類型とに大別して捉えなおした。これにより，多種多様な類型と分類基準・指標を，対象地域のスケールや類型化の意図に応じてある程度再整理することができた。そして，従来の類型論がもってきたいくつかの限界とともに，地域類型と経営形態類型という異質のアプローチからの類型化および分類指標・基準の複合こそが重要であることを指摘した。

最後の点は，ミクロスケールの地域研究においてこそそれが強く言えるのであり，事例の経営形態の評価や家畜飼養の地域類型の抽出をする際には，従来の移動牧畜の類型論を役立てる必要がある。平板で静的な地域類型と，動態のごく一部しか把握・説明しない経営形態類型の並存状況を打破するためには，上記①から③の限界を解決することが必要となる。それはこれからの課題とならざるをえないが，これらの限界に関わる若干の視点を提示して稿を閉じるこ

とにしたい。

ヒマラヤ地域のいくつかの調査を手始めとして，近年には西アフリカ，インドのラージャスターンやカルナータカ，さらにイランにおいて移動牧畜や農村における家畜飼養を調査してきた筆者が，そのなかで常に感じてきたのは，実は上記の①から③の限界にほかならなかった。多くの地域で見ることのできた家畜飼養とその動態の多様性に戸惑いながらも，そのさまざまな違いを十分に納得させてくれる類型論や比較研究が存在しないことには強い飢餓感があった。しかし，さまざまな既存の類型を調査する作業は，個々の類型がもつ限られた有効性を再確認することにもなった。

上記の限界を乗り越えていくうえで，いまのところ筆者が感じていることの一端を表現すると図４のようになる。いわゆる遊牧民なり半牧民・農牧民の生業経済や食糧の獲得は，牧畜生産と農耕生産に加え，交易・商業なり輸送業や賃労働といった第３の生業部門をあわせた３つの生業部門の複合からなる。彼らの生業経済は，まずこの３角形の構図から捉えていく必要があるのではないか。従来の遊牧・牧畜研究と移動牧畜の類型論が意識してきた経営形態の遷移は，農耕民化・定住化という，牧畜から農耕へ向けての遷移軸にほかならない。この遷移軸で考えることは，歴史上，農民から牧民へのという逆方向への遷移もありえたことを考えるうえでも有用であり，このスペクトラムで考えることが誤りではないがそれは決して十分ではない。とくに，それが定着へと近づく部分は多くの場合研究の視野からは切り捨てられてきたわけであり，あまりにも牧畜生産という極を中心に考えられ過ぎてきたといえる。この意味で，従来の類型を拡張して，定着的家畜飼養，農牧・定牧，および混合農業経営下にお

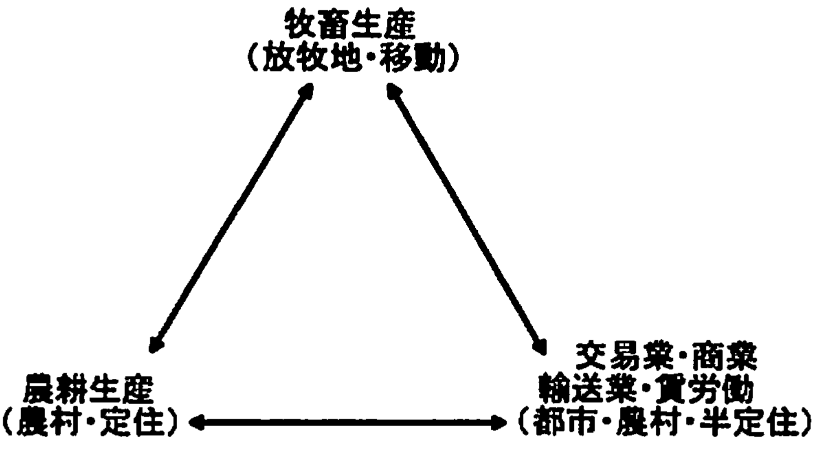

図４．生業複合の３角形

ける牧畜・畜産経営を取り込む，つまり移動するしないに関らず家畜飼養全体を取り込む必要がある。移動牧畜といっても，いわゆる遊牧中心で考えるのではなく，むしろ農牧を中心に考える分類があってもよいのではないかと思われる。その意味では，カザノフや福井・稲村が指摘した程度の定着的家畜飼養や農牧の捉え方，類型化でもまだまだ不十分である。

また，牧畜生産から第3の生業部門へと向かう遷移・近代化の軸が，今後検討される必要があろう。これは，生産ではなくて物や労働力・金銭の交換，あるいはそのための畜力・人力・畜産物利用という第2の方向への遷移であり，その中身は多様である。家畜を生産手段としてではなく資本として扱うような生業部門もここに含めてよく，この遷移は農村よりむしろ都市へと繋がる遷移ともいえる。現代における移動牧畜民の動態を見ると，必ずしも農民化するのではなく，むしろ，都市・農村周辺の，非牧畜的ノマッドに転落してゆくことがもっと注目されなければならないと思われる。さらに，技術進化の次元での遷移も考える必要がある。とくに，定着農耕への遷移軸おいて，単に農・牧の比率の変化ではなく，いわゆる有畜農法的な農牧技術発展などの，いわば第3のこの図の平面に直行するZ軸方向への遷移である。これらいくつかの遷移軸を取り込むことなしに，現在の動態把握や将来の予測，あるいは地域計画に役立つようなかたちで牧畜類型を生かすことはできないように思われる。

最後に，家畜種という指標と，ジョンソンが喚起した移動牧畜の空間的形態・地形という条件は，地域類型アプローチを採るうえでも経営形態類型アプローチを採るうえでも非常に重要であることを再確認しておきたい。フィールドでの観察では，ヒマラヤなどの山地で見られる垂直型の移動牧畜と，サハラ砂漠やタール砂漠の縁辺部で見ることのできた水平型の移動牧畜とでは，移動牧畜のさまざまな性格や経営の安定性において非常に対照的であるとの印象を得ている。また，今後上記の2つのアプローチを複合させていくうえでも不可欠の要素だと考える。だが，これについては稿をあらためて論じることにしたい。

文　献

Arbos, P., *La vie pastorale dans les Alpes francaises*, Paris, 1922 (Bulletin de la Societe scientifique de l'Isere, xliii).

Arbos, P., The geography of pastoral life, *Geographical Review*, 12, 1923, pp.559-575.

Bacon, E. E., Types of pastoral nomadism in central and southwest Asia, *Southwestern*

Journal of Anthropology, 10, 1954, pp.44-68.
Bishop,B.C., *Karnali under stress: livelihood strategies and seasonal rhythms in a changing Nepal Himalaya*, University of Chicago, Geography Research Paper 228-229, 1990, 460p.
de Planhol, X., Demographic pressure and mountain life, with special reference to the Alpine-Himalayan belt (Eyre, S. R. and Jones, J. eds., *Geography as human ecology*, London: Edward Arnord, 1966, 308p.), pp.291-308.
Galaty, J.G. and Johnson, D.L., *The world of pastoralism: herding systems in comparative perspective*, New York: The Guilford Press, 1990, 436p.
Ingold, T., *Hunters, pastoralists and ranchers*, Cambridge University Press, 1980, 326p.
Johnson, D. L., *The nature of nomadism: a comparative study of pastoral migrations in Southwestern Asia and Northern Africa*, University of Chicago Department of Geography Research Paper no.118, 1969, 200p.
Khazanov, A. M., *Nomads and the outside world*, 2nd ed., University of Wisconsin Press, 1994, 382p.
Krader, L., The ecology of nomadic pastoralism, *International Social Science Journal* 11(4), 1959, pp.499-510.
Matley, I. M., Transhumance in Bosnia and Herzegovina, *Geographical Review* 58(2), 1967, pp.231-261.
Price, L. W., *Mountains and man: a study of process and environment*, University of California Press, 1981, 506p.（とくに pp.400-418.）
Rathjens, C., Troll, C. and Uhlig, H. eds., *Comparative cultural geography of the high-mountain regions of south Asia*, Franz Steiner, Wiesbaden, 1973, 184p.
Rathjens, C., Fragen des Wanderhirtentums in vorder- und Süasiatischen Hochgebirgsländern, (Rathjens,C., Troll,C. and Uhlig,H. eds., *Comparative cultural geography of the high-mountain regions of south Asia*, Franz Steiner, Wiesbaden, 1973, 184p), pp.141-145.
Scholz, F., *Nomadismus: Bibliographie*, Berlin: Das Arabische Buch, 1992, 552p.
Scholz, F., *Nomadismus: Theorie und Wandel einer sozio-ökologischen Kulturweise*, Stuttgart: Franz Steiner, 1995, 300p.
Tivy, J., *Agricultural ecology*, Longman Scientific & Technical, 1990（Tivy, J. 著（小倉武一訳）『農業生態学』，養賢堂，1994 年，400 頁。）
Uhlig, H., Wanderhirten im westlichen Himalaya: Chopans - Gujars - Bakerwals - Gaddi, (Rathjens,C., Troll,C. and Uhlig,H. eds., *Comparative cultural geography of the high-mountain regions of south Asia*, Franz Steiner, Wiesbaden, 1973, 184p), pp.157-167.
ブロック，マルク，『フランス農村史の基本性格』，創文社，1959 年，343 頁。
ブローデル，フェルナン（浜名優美訳）『地中海　I　環境の役割』，藤原書店，1991 年，134-161 頁。

福井勝義，牧畜社会の生活，（祖父江孝男監修『社会科のための文化人類学』，下巻，東京法令出版，1982年），806-827頁。
福井勝義，牧畜社会へのアプローチと課題，（福井勝義・谷泰編『牧畜文化の原像』，日本放送出版協会，1987年，3-60頁。）
今西錦司，『遊牧論そのほか』，平凡社ライブラリー，1995年，270頁（再版。初版は1948年，秋田屋）。
稲村哲也，中央アンデス高地の牧畜，（佐々木高明編『農耕の技術と文化』，集英社，1993年），261-291頁。
稲村哲也，『リャマとアルパカ』，花伝社，1995年，285頁。
稲村哲也，アンデスとヒマラヤの牧畜，ＴＲＯＰＩＣ（熱帯研究）5(3/4)，1996年，185-211頁。
小林茂，ユーゴスラビアの移動牧畜，人文地理 21(1)，1974年，1-29頁。
小林茂，書評：Irons, W. and Dyson-Hudson, N. eds., *Perspectives on nomadism*, E. J. Brill, Leiden, 1972, 136p.，地理学評論49(4)，1976年，267-268頁。
小林茂，地中海東部の牧畜民における移動と定着，『地中海地域における集落形成の諸問題』，一橋大学地中海研究会，1980年，27-34頁。
小林茂，牧畜の世界，歴史と地理323，1982年，1-18頁。
ピティ，R.（奥田或・上野福男訳）『山地地理学』，農林協会，1956年，278頁（Peattie, R., *Mountain geography: a critique and field study*, Harvard University Press, 1936, 239p.）
佐原眞，『騎馬民族は来なかった』，ＮＨＫブックス，1993年，231頁。
末尾至行，オアシス農業と遊牧の間－西南アジアに関して文献紹介的に－，人文地理13(6)，1961年，62-74頁。
末尾至行，農村における家畜飼養，（織田武雄ほか『西南アジアの農業と農村』，1967年），169-175頁。
末尾至行，アフガニスタンの遊牧民，（岩田慶治編『＜世界地誌ゼミナールⅡ＞南アジア』，大明堂，1972年），57-75頁。
高橋正，家畜の移動する牧畜－旧大陸に関し形態論を中心として－，（山口平四郎編『産業地理学の諸問題（上）』，柳原書店，1963年），103-122頁。
竹内啓一，定住化－生活様式論として－，一橋論叢 61(3)，1969年，304-321頁。
谷泰，『牧夫フランチェスコの一日』，平凡社ライブラリー，1996年，293頁（再版。初版は1976年，ＮＨＫブックス）。
月原敏博，有畜農業と家畜種 －インド，ラダックの農牧連関－，人文地理46(1)，1994年，1-21頁。
上野福男，スイス山地農業—その促進措置と地域区分—，駒沢地理22，1986年，1-28頁。
上野福男・池永正人，アルプ農業の推移，駒沢地理19，1983年，27-52頁。

梅棹忠夫，『狩猟と遊牧の世界』，講談社学術文庫，1976年，174頁。
ヴェルト，エミール，『農業文化の起源』，岩波書店，1968年，605頁。
安田初雄，移牧，地理3(10)，1958，1280-1284(54-58)頁。